『沖縄建設新聞』
2005 年 3 月 9 日～8 月 10 日
第二、第四水曜日に掲載

# 沖縄ん
# 建築紀伝

## 横断する眼差し

国場幸房（建築家）

■ １回 ■　戦火と復興の中で
■ ２回 ■　高校時代、夢は物理学者
■ ３回 ■　メタボリズムの潮流の中で
■ ４回 ■　貴重な大高事務所での体験
■ ５回 ■　國場組新社屋ビル設計で奮闘
■ ６回 ■　建物の形態は、その空間から生まれる
■ ７回 ■　天空を大地へよび込む空間の創造
■ ８回 ■　建築家に過酷なコンペ世界
■ ９回 ■　沖縄県立公文書館でＢＣＳ賞を受賞
■ 10 回 ■　夢への挑戦・沖縄美ら海水族館
■最終回■　「光と風の建築」を求めて

題字、編集協力：親泊仲真

『沖縄建設新聞』
2005年3月9日(水)2215号

# 沖縄ん 建築紀伝

## 横断する眼差し

■1回■　国場幸房(建築家)

## 戦火と復興の中で

〈去る大戦で戦場と化した沖縄。その荒野からの復興はその当時の建築界の方々と琉球政府、米軍陸軍省技術協力会が一丸となって行われた。一九五四年頃から七万五千戸の規格住宅や農村住宅のモデルが出来た。戦後の住宅は貧困の中で「台風」「白蟻」との戦いでもあった。木造茅葺、木造トタン葺き、木造セメント瓦、赤瓦葺きからブロック造、RC造へと。

國場幸房さんは一九三九年に生まれ、戦争を跨いで復興時に少年期を迎えた。戦後復興からの建設業界を名実共にリードしてきた國場幸太郎さんの甥にあたる。環境にも恵まれ、幸房少年は中学から東京で学び始め、大学卒業後も著名な設計事務所に籍を置く。青年期を建築界の先端にて、肌で感じ取りながら本土復帰前に帰沖する。

復興著しい沖縄から東京への学業生活と勤務、二〇年近くの東京での活動を抱えて、地元での設計活動を開始。復帰直前の国場ビルから最近完成した「美ら海水族館」まで、沖縄の時代を象徴する建築物を手がけてきた。ホテル　ムーンビーチは沖縄観光の先駆けでもあった。常に時代の風を意識しつつ沖縄の風土性を相対化した作品群と國場さんのヒューマンな人柄と混在させて語ってもらった。〉

私は沖縄戦の五年前、那覇市上泉町で生まれ松下町で戦争にあった、近くの教会は憲兵隊が陣取り、時々男の人の悲鳴が聞こえたのを憶えている。十／十の空襲は庭の防空壕に隠れた。**父は家族を防空壕に避難させた後、そのまま仕事場を心配して読谷の飛行場現場へ自転車で向かった。**姉と私、妹は母が負ぶって、姉は小学校四年生だったが一人で畳を抱えて防空壕に持ち込み皆で避難した。(兄は学童疎開で宮崎に行っていた)周辺の人たちも集まり一四～五名程になったかと思う。タマタマ空襲の最中にオシッコがしたくなり外へ出たら空が真っ赤に染まっていた。

何所かのドラム缶が火の玉になって真っ赤な空を飛び散っていたのを鮮明に憶えている。その後、近くの墓に移動して避難、その夜は識名園の森へ逃げたという。私も防空頭巾を被って隣の小母さんにオッパ(背負う)されて家族と逃げた。有難いことに、オニギリを配っている人が居た。翌日の朝松下の我家に戻ったが、我家も含めて見渡す限り焼野原化しており、庭の木に一個のボンタンだけが残されていて、その時姉は泣き出したと話をしてくれた。焼け跡の中から、茶碗類を抱えて再び避難する途中、戦闘機が空中に現われたのであわてて伏せたが、日本軍の戦闘機だったのでバンザイと叫んだのを憶えている。伏せた衝撃で茶碗は全て割れていた。私たちは運よく通りがかった國場組の車に便乗し祖父の住む山原へ避難した。

戦前、沖縄には大手建設企業があり、國場組設立当初は本島の僻地や、宮古等の離島の仕事を請け負った。最初の元請の仕事は郷里国頭の木造の辺土名小学校で、そこで父と母は出会い結婚した。

その後、**國場組は明治橋建設の大きな仕事を受注するが、大きな赤字を出しながら見事完成させ、公的な機関からおおきな信用を得て、続けて仕事を受注することが出来た。その結果、戦時中の飛行場建設の多くを任された。**その当時の特に飛行場建設の仕事は人海戦術であり、先ず、飯場を造ることが最優先であったらしい。**私たち家族も住み家が一定ではなく、現場が変るたびに移動し、私が生まれるまでは、現場が家であったと聞く。**

戦争が始まり、國場組も避難の準備に追われた。現場の米俵をトラックに積んで国頭山原に向かった。道中、橋が破壊され、米俵を積み上げて橋を渡りきったという。國場組の社長である叔父の國場幸太郎はその当時福岡に居て帰れない状態だった。父の幸吉が大勢の人の中心になり戦争を乗り切った。

**その当時の父は三九歳であり、今思うと、かなりの大仕事をよくやっていたのだと感心する。**(幸太郎社長は戦後、一九四六年八月に密航で沖縄に帰り、同年の九月に國場組を再建している。)

戦時中は山原の祖父の家の更に奥の山の中に避難していた。**父達は、長期戦に備えて、山を開墾し芋を植えていたが収穫を待たずに終戦を迎えた。**戦後、私は一時期、国頭の浜の幼稚園に通っていたが、父の仕事の都合で具志川の川崎小学校に四年まで過ごし、その後那覇の城岳小学校に転校。城岳中学をへて上ノ山中学の二年終了後、東京の区立池袋中学三年へ編入した。

國場氏のスケッチ高校2年
1957年東京にて

『沖縄建設新聞』
2005年3月23日(水)2217号

# 沖縄ん建築紀伝

## 横断する眼差し

■2回■　国場幸房(建築家)

## 高校時代、夢は物理学者

### 松尾の頃

一九四九年（一〇歳）頃に那覇に戻り、松尾の小さなカヤブチ屋―に住んだ。

近くには、露天の中央劇場（現松尾公園）があり沖縄芝居や映画の上映があり、昼間の楽屋は子供たちの遊び場であり、神里原の子供たちとパッチー（メンコ）や玉グァー（ビー玉）の勝負所だった。現在の松尾消防署から国際通りへ至る下り坂では、オート三輪車が転倒するのをよく見かけた。戦前に完成した武徳殿も戦渦をくぐり残っていて、警察の武道場として使われていて、友達同士で遊びに行き「柔道は受身から」とか言われ投げられてばかりいた。

絵も好きで時代劇の嵐勘十郎や片岡知恵蔵、ベートーベンの似顔絵も描いていた。小学五年時にはペンテルの第一回写生大会があり五年の部で一等をもらい、その後3～4回一等になった。音楽にも興味を持ち、沖映通り近くにピアノを数ヶ月間、習いに通ったこともあった。

一九五四年、復興著しい沖縄で一四歳まで過ごしたが、上之山中学二年終了後、兄幸一郎（当時、早稲田大学学生）の居る東京へ行き、区立池袋中学へ転校する。

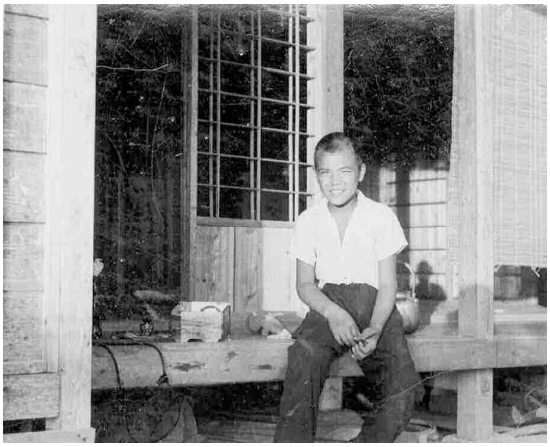
やんばるの祖父と祖母1967年頃

### ひとりで上京

一九五四年三月、一人でちとせ丸に乗り三泊四日で東京月島桟橋へ着いた。船中、船酔いで寝てばかりいたが、何処からともなく「富士山が見える！」と声がした。富士山は見なければと思い起き上がって、山並みを見回したが見つからない。しばらくして雲海の上に視線を上げると、体験したことない角度に富士山の山頂が現れたので驚いた。さすが世界に誇れる富士山だと思った。

兄が迎えに来ることになっていたが、日が暮れても兄の姿はなく多少不安な気持ちになった矢先に現れた。その年、東京は二〇数年ぶりの大雪で、ビング・クロスビーのホワイトクリスマスが流れ、初めての雪景色を目の当たりにした。その当時、山の手線は全線一〇円で乗れた。落語で云うひと月一〇円（トコロテンひと突き一〇円）で食えた時代である。

兄と一緒に池袋に移り住み、学校にもすぐ慣れて、ヤマトンチュのクラスメイトにも違和感はなかった。沖縄から来たといゆう特別な意識は無かった。



城岳中1年、鉱石ラジオ製作中

### 早稲田高校へ進学

池袋中学から早稲田高校へ進学した。高校時代は応用物理や科学の世界に興味を持ち、夢は物理学者になることだったはず。苦手な科目は日本史で、そこでは資料研究のレベルであり通常の高校の授業スタイルではないようにおもえた。歴史は一〇～二〇点しかとれず、先生に呼び出され「國場君、君は沖縄か。それじゃー日本史が得意でなくてもしようがないかー」と言われて大目に見てもらって助かった。

建築は学問だという意識はなく、アインシュタインへの蘊蓄を傾けていた

兄は早稲田大学の建築学科で吉阪隆正に傾倒してデザインの分野を目指し勤しんでいたようであるが、途中から内藤多仲教授の建築構造の世界へと変り、大学院は鶴田研究室にいて、時々広瀬鎌二氏の住宅設計の構造のアルバイトをしていたらしい。

**弟の僕に「おまえは絵が得意だから建築意匠計画に進め」ということになり、**抵抗もしたような気もするが、結局、早稲田大学の建築学科へ入学、デザインの方へすすんだ。

早稲田高校入学後、池袋の長屋寮にて隣人たちと

『沖縄建設新聞』
2005年4月13日(水)2219号

# 沖縄ん建築紀伝

## 横断する眼差し

■3回■　国場幸房(建築家)

## メタボリズムの潮流の中で

〈一九五八年に早稲田大学に入学する。その当時の日本は高度成長の時代に入り、耐久消費財のテレビ、洗濯機、冷蔵庫の「三種の神器」が大流行。建築界では、先日、逝去された世界的な建築家丹下健三氏による東京都庁舎や菊竹清訓氏のスカイハウスやフランク・ロイド・ライトのグッゲンハイム美術館が完成する。〉

絵が得意ということで建築学科の計画の方へ進むことになったが、まだ建築に傾倒する知識も無く一般的な悩み多い青春の最ただ中であった。日ごろ悩み気にしていたこともあって、一般教養科目に哲学、論理学、心理学のそれぞれの概論を選択して受講した。哲学概論では（考えている事、此れ即ち哲学である）と聞いて癒される思いをした。論理学概論では（AはAである）の公理を、歴史の中で長年繰り返し議論された世界を知った。神秘的に思っていた心理学概論では心理学が統計の数字の上に成り立っているように思えてホッとした。その他、芸術に対する疑問は、岡本太郎の（今日の芸術）を読んで勇気付けられた。**最大の課題である、人生については小林一茶の（タライからタライへのちんぷんかん）の言葉のように、結局は分からんということで一先ず自分を落ち着かせた。**

### 建築学科で教わったこと

其の頃建築の世界では、シドニーのオペラハウスのコンペが話題になっていた。リアルタイムで穂積信夫先生がアメリカから帰ってこられ、オペラハウスが設計者ウッチオンに決まった経緯など、イエーロ・サーリネンのTWA空港を設計したときの話などは情熱的な話で学生に夢とロマンをもたらしてくれた。又、今井兼次先生はガウディーやシュタイナーの建物を感動的に静かに力強く話された。憧れの吉阪隆正先生はキリマンジェロや世界中の登山に出かけ、結局一回の講義と数回のゼミしか聴講出来なかったが、それでも強く印象に残っている。コルビュジエの弟子である吉阪先生のコルのモデュロールの話などフランス語を混ぜながら語ってくれた。氏は殆ど我々に講義をしてやれなかったことを謝罪しながらも、世界中で早稲田大学のプロパガンダをしているので、どの国へ君たちが行っても大丈夫だという話は愉快だった。

〈一九六〇年、日本は六〇年安保闘争で激動の時期を迎える。三十三万人のデモ隊が国会議事堂を取り巻き、学生運動最盛期であった。建築界でも一九六〇年の世界デザイン会議に向けて結成された「メタボリズム」グループの活動が隆盛になり、新たな建築の方向性を模索した時代でもあった。新進気鋭の大高正人、川添登、菊竹清訓、槇文彦、黒川紀章氏らが中心になった。戦後の建築潮流の一端を構築した。その運動の理念は、建築とか都市は固定化され閉じた機械であってはならないし、常に新陳代謝をしながら成長していく有機体でなければならないという理念に基づくものであった。増殖、交換、分裂、破壊という4つの要素があった。時代の潮流にものり、日本初の国際的な建築運動としてアジアをはじめ広がっていったと思う。〉

大高事務所時代の仕事風景

建築の設計実習の教科に日本の近代建築の巨匠前川國男（故人）の愛弟子大高正人先生が講師として我々を教えに来てくれていた。ある時学習の一環として氏が前川事務所で携わっていた竣工間際の上野にある東京文化会館の現場見学をさせてもらった。**その時の建築空間の素晴らしさに感動し、建築設計の思考の重大さや偉大さを考えさせられた。**その後、大高先生が独立して事務所を開設したので、卒業後、日本の最先端の設計世界を学びたく入所をお願いし許可された。その当時、大高事務所には「メタボリズム」グループの人たちの出入りが頻繁であった。

葉山での所員たちとの憩いのひと時

事務所のある代々木の周辺には大谷幸夫や鬼頭梓、黒川紀章氏などの著名人の事務所が多く、嫌が上にも刺激のある環境であった。所員の間では常に建築論が戦わされていて、**一～二年は週一度しか帰宅出来ない状況が続いた。**

大高事務所時代
週に一度しか帰れない日々が続いた

『沖縄建設新聞』
2005年4月27日(水)2221号

# 沖縄ん建築紀伝

## 横断する眼差し

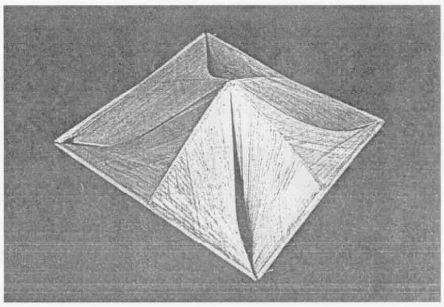
■4回■　国場幸房(建築家)

## 貴重な大高事務所での体験

前川國男がコルビュジェの事務所に手紙を送って返事をもらい、卒業式を待たずに大陸横断シベリア鉄道に乗りコルビュジェ事務所に入ったように、著名な事務所に入るには積極性と情熱を必要としたような話を数多く聞いていた。

その気概は前川の愛弟子であった大高事務所にも受け継がれていた。大高さんも三十六歳で事務所を開設し、**スタッフの人たちにもいずれいろんな場で頑張ってほしいという考えが根底にあったようである。**三三歳で定年というのも**その考えの表れであったと思う。**そこに入所を許された私自身もご多分に漏れず、その意志と情熱を受け継ぐように努力した。

笑い話になりかねないが、事務所内においても**大高さんの一挙手一投足や所作に細心の注意を払い観察する日々であった。どのような時に咳払いをし、どのような時に頷くのか、等々、**観察に勤しんでもいた。仕事中に製図板の後ろを大高さんが通り過ぎる時の張りつめた空気感。そのまま無言で通り過ぎると、やるせない気持ちになり、最初の一～二年はそのような状態が多かった。ある日、大高さんがあるエスキスを見つめ、「これ誰が描いたの」と言われたので、他の者が「國場君のです」と応え、頷かれた。その時の嬉しさと感激はいまだに憶えている。やはり一日も早く認めてもらいたいという一心でもあった。そのような毎日の積み重ねを、三年間という限られた時間を意識しながら勤めていた。大高さんの思想や建築に対する姿勢と表現までを、所員たちはどん欲に吸収していった。今に思えば、大高事務所での約五年間は私にとって、建築に対する基本的な関わり方や思想の形成の後ろ盾になっているのだと考えている。



コンペ「国立京都国際会館」で屋根、数多く種類のHPシェルの模型を作るので、30分で製作する方法を考えた。

そのような思いは私に限ったことではなく、建築の設計を目指す当時の若い人たちは、近代建築の明確さもあったが、著名な事務所に入所するためにあらゆる努力を惜しまなかった。そのようなアトリエ的な事務所は殆ど薄給に近い状況であった。ちなみに僕の月の給料は一万参千円であり、大手のゼネコンクラスは約二倍であった。給料云々よりも、憧憬する建築家の事務所に入所することを何よりも優先した時代だったのである。

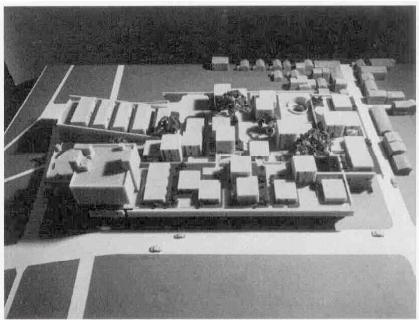
一九六四年は東京オリンピックの開催年であり、次々と大規模の建築物が出来ていった。

先頃、亡くなられた世界的建築家の丹下健三氏の国立総合屋内競技場（代々木体育館）はその頃、丁度工事中であり、度々、事務所を抜け出して見学に行った。あの恐竜の助骨を連想させるような工事中の屋根の鉄骨の伸びやかな曲線美の迫力に魅せられた。沖縄に帰るまでの五年間はメタボリとも重なり若手の著名建築家たちが活発な活動を展開している時期でもあった。

〈一九六六年に完成した「国立京都国際会館」は戦後の日本における三大コンペの一つと云われ、一九五点の応募作から大谷案が最優秀に選ばれた。直立の柱の概念を打ち破った斜めの列柱による空間の構成は大胆さとスケール感のダイナミズムを感じさせる。〉

私が入所するや否や、「国立京都国際会館」の大きなコンペが始まり、**六ヶ月間に渡るコンペに参加出来た事は大変貴重な体験であった。コンペの最中、ある時、大高さんが「このコンペで優秀作品の四点に選ばれなかったら俺は坊主になる」と言い出したようである。**審査委員の丹下先生が、あるマスコミのインタビューの席で「無名の建築家が当選することもあるのか」という質問に対し「それはあり得ない。必ず力のある人が当選するでしょう」と答えたという話しを聞いた。その当時は、近代建築に対する評価がしっかりしていたので、先を読むことが出来たのでしょう。

コンペ作品を提出した後の、社内にて酒を飲みながらの打ち上げ宴をしていると、黒川紀章氏がコンペに提出した案を大高さんに見せに来た。氏が帰った後暫くして評論家の川添登氏がいくつかの作品ニュースを仕入れて参加してきた。その中の一つである菊竹清訓さんの案の話しになった際に、大高さんはショックを受けたように見受けられました。しばらくして、トイレから戻ってこられ「ああ、菊竹は二番だね」と言われ、それから「のこりは、大谷だね」と言った。その時、大谷さんの案はだれの情報にはありませんでした。審査発表の結果は、優秀賞に大谷、大高、菊竹、芦原の四点が入り、最優秀に大谷案が輝いた。**その時の予想が的中したことにさすがに驚きと敬意を感じせざるにはおれなかった。**



「坂出の人工地盤」計画の模型、当時スタイルホームを使った模型はめずらしかった

大高事務所での約五年間にわたる仕事や諸々の体験は、**日本の先端に触れながらの刺激的で貴重な時間であった。**又、そこで知り合った多くの人たちも大切な宝である。その体験を携え、一九六七年、希望と不安感を持ちながら沖縄に帰った。

『沖縄建設新聞』
2005年5月11日(水)2223号

# 沖縄ん建築紀伝

## 横断する眼差し

■5回■　　国場幸房(建築家)

## 國場組新社屋ビル設計で奮闘

一九六七年に沖縄に帰り、兄幸一郎が設立していた国建に入社し、建築設計部の一部をまかされた。建築とは元来、人間と自然との対話で出来上がった文明であると考えると、地域、風土によって建物の形態は異なるはずである。これらの事を、これから沖縄の先人たちの知恵をかりながら探求しなければという思いで使命感を抱いていた。

そのような考えをしている時期に、國場組の新社屋ビルの計画が持ち上がっていた。計画地は、戦前、國場組本社があった久茂地川沿いの区画整理によって一部公園に削られた四〇〇坪の全面道路の四角い敷地であった。道路を挟んだ前面が川で、後ろ面が公園になっていて、旧法規での斜線制限を受けない場所である。構造審査会に適応しない四五m以下で計画を進めた。後日聞いた話では、建築主である國場幸太郎社長は四～五階建ての本社ビルを予想していたらしい。兄幸一郎から伝わった話は、同敷地に出来るだけ大きな建物を造ることであった。

―その頃、本土では、旧建築法規の三一mの高さ制限が見直され、日本初の超高層建築の霞ヶ関ビルが完成する。至る所で容積率制限による高層ビルが計画されていた。沖縄においてもそろそろ新しい法規の適応時を視野に入れていた。

風土と建築を考え続けていた時だけに、高層事務所ビルにこれらの要素をどのような手法で適応させるべきか悩んだ。まず、本土で当時流行していたカーテンウォールの手法は取り入れないことからスタートした。沖縄の強烈な日差しやスコール、さらに塩害に加え、停電やその他の理由による窓の開閉、清掃等のメンテナンス、防災等の様々な条件を考慮した。それで庇を兼ねたフレームを取り入れた。その庇の先端に柱を配置し、**人間が通れる二七cmの隙間を設けた。そのことにより多くの問題を解決した。**沖縄の民家の手法で見られる雨端による彫りの深さと中間領域的空間の創出が出来たと思う。

工事が始まると、現場好きの幸太郎社長はいろいろ指示を出していたが、現場担当者には社長が見えたら「幸房さんに直接伝えて下さい」という指示を出してあった。社長との対立は依然として続いた。國場組の先輩方の助言では「社長は早朝の方がご機嫌なので、自宅へ訪ねた方が良い」というアドバイスを受け実行したが駄目であった。とうとう「ワシが金を出して、ワシのビルを建てるのに、何故ワシの云う事を聞かないのか。ワシはこの道五〇年で、オマエは何年建築をやってきた」と社長に怒鳴られる始末だった。私自身は若さも手伝って、國場組から仕事を依頼され、國場組の社員のためのビルであり、これだけ大きな建物となると社会的な責任があると考えていたので社長に反論するわけにはいかず、**黙々と抵抗を続けた。とうとう、甥っ子の中で一番の頑固者扱いとなった。**

総工事費は百八十万ドルで地下三階、地上十二階建てで延べ床面積約四八〇〇坪の規模である。一般的には約2分の1の三六〇ドルの坪単価で出来たことになる。工事に関しては当時の国建の社長でもあり國場組の工事支配人でもあった兄幸一郎が中心になり、資材等の調達に努めていたようである。私は設計の方で随所に経済設計の手法を取り入れることにも努力をした。例えば、矢板無しのオープンカットで施工出来るように地下三階の面積を小さくしたり、またサッシュの型材の断面を単純化するなど、ガラスの大きさもハギレの少ないようにサッシュ割をしたり、外装内装面にも工夫を凝らし、新商品の吹き付けタイルを内外壁面の仕上げ塗装として統一。一二五〇ミリのモデュールも採用した。鉄骨も実施設計の段階でGコラムに変更された。その当時、最新の技術であったデッキプレートを使用しスラブのコンクリートを打設した。それは、工事事故や工期短縮に貢献した。玄関ホールの石張りは石材部にある他の現場の残材を利用、建物周りの犬走りには國場家の郷里の近くのヒジヤ川から玉石を運びモルタルに埋め仕上げた。

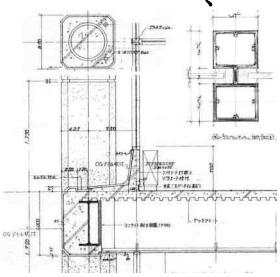
竣工祝賀会の席で、いろいろお褒めの言葉を頂いたらしく、会の後の夜の宴会の席を早々と抜け出した幸太郎社長は、数人が現場小屋で慰労会をしている中から私を呼び出し、暗い中を二人で改めて建物を見て回った。しばらくして、言いにくそうに「ナア　シムサ（もう許すよ）」と一言。**それから沈黙が続いた、山原の貧困の生活から出発し、苦労を重ね、兄弟で力をあわせて、國場組を設立してきた思い出等が走馬灯のようにこみ上げてきて感慨にふけて居るように思えた。**

そのような経過で私は参加して、新社屋である國場ビルは一九七〇年三月に竣工した。当時は、那覇市の広範囲からも視野に入る高層ビルであり白くそびえていた。那覇の市街地のスカイラインが都市的なイメージを獲得する起点をもたらしたと考える。竣工後の一週間は祝いも兼ね、夜中も全照明を点灯しライトアップ。首里の丘を初め遠方からの夜景に彩りを添えランドマーク的な存在だったようである。

**復帰前の沖縄では、本土復帰に対する様々な不安が巷の噂になっていて、丁度その頃に、國場組が大規模な高層ビルを建てたことで、それらの不安や憶測の一部が解消された話を聞いたことがある。**竣工後は幸太郎社長と顔を合わせる機会も減り、たまに会うと、懐かしそうに「ヌーンチ、チカグロー　チラ　ンジャサンガ（何でこの頃、顔を見せ無いのか）」と仰せられたので「ウンジョー　チラ　ンジャシーネー　シグヌライルスルムンヌ（あなたは、顔を見るとすぐ叱るものだから）」とジョークを込めて返事をすると、苦笑いされた。

竣工一年後、國場組創立四〇周年記念祝賀会が同ビル十階ホールで開かれた。勤続年数の功労者に対する表彰等があり、最後に、社外関係者である私に、國場ビルの設計者としての特別賞として賞状と柱時計の記念品を頂いた。

**数多くの役職を持ち、多忙な幸太郎社長であるにも関わらず、繊細な気配りを頂いたことに改めて感動した。國場ビルの設計に関する設計意図を貫いたことにより、頑固者扱いもされていたが、そのお陰で、しばらくして始まった「ムーンビーチリゾートホテル」の設計の仕事にも、それらの事が活かされたと思う。**



『沖縄建設新聞』
2005年5月25日(水)2225号

# 沖縄ん建築紀伝

## 横断する眼差し

■6回■　国場幸房(建築家)

### 建物の形態は、その空間から生まれる

〈一九七〇年に日本万国博覧会が大阪で開催された。日本の著名な建築家たちも各パビリオンの設計に関わり建築界は華やいだ。沖縄では通貨の切り替え、国政参加や七二年の本土復帰と慌しく時代の変わり目に直面。復帰後の七三年には石油ショックと狂乱物価が日本列島に吹き荒れた。七五年の「海―その望ましい未来」をテーマに沖縄国際海洋博覧会が開催された。公共、民間など三千億円の投資の一大事業であった。〉

海洋博覧会が近づくにつれ、本土の著名な建築家の方々の来県も頻繁になった。

私も、槇さんをはじめ数名の建築家の方々と会う機会もあったが、博覧会場の仕事は現実的には東京の著名な建築家がメインになるであろうと予測された。ちょうど時を同じくし「ムーンビーチホテル」の構想計画が、海洋博のオープンに間に合わすべく持ち上がっていた。

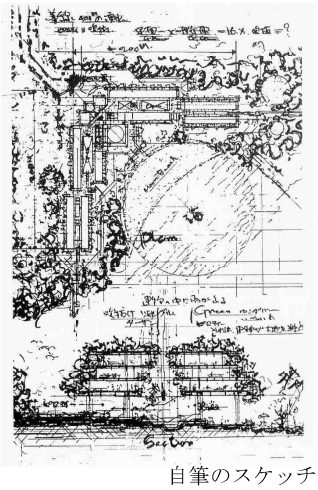
かねがね、沖縄の観光産業の重要性を唱えていた国建の社長でもあった兄幸一郎は、ある成り行きでムーンビーチを国建で購入していたようである。そこで三百～四百室のリゾート施設の計画をするようにといわれた。私は喜びいさんで、直ぐ現場を見に行った。浜辺を抱く現在のムーンビーチの原形になるスケッチをした。ところが購入していた敷地は三千坪らしいことが分かり、**スケッチの建物のほとんどが敷地からはみ出していたので落胆した。がっかりしていると、兄幸一郎が建物に合わせて敷地を広げると言い出し、最終的には二万千坪の敷地を確保することが出来た。**

ムーンビーチから俯瞰した「ムーンビーチホテル」の全景
400mのピロティ空間をもつ

かねがね考えていた空間のイメージを盛り込んだムーンビーチの一／五〇〇のボリウム模型を作り、関係公的機関に説明をしてまわり、現実味を帯びて進んでいった。海洋博に負けないようなしっかりした建物をつくろうという意気込みがあった。しかしながら、いざその思いが現実のものになってくると、一抹の不安もよぎった、この計画への自分の考え方を確かめたく、初めての外国への視察を思い立った。**兄幸一郎に「地球は丸いらしいね」と言ったら、「あー、いいよ」とすぐ察してくれたので、そのまま二十日間の世界一周の一人旅へ出発した。**ハワイ、アメリカ、フランス、スペイン、イタリアなどのリゾート地をまわった。

**国や人種は違えども、人間の感情や思いは、人類すべて同じだという当前のことを身体をとうして実感しそれを認識する旅であった。**

**このムーンビーチの設計は国際的にも、ある程度のレベルまで達しているとの思いを実感し勇気を出し、そのまま仕事を進めていった。**心の片隅には完成したら、私の建築の恩師である大高氏にも何時の日か見てもらう事も意識の中にあった。



自筆のスケッチ

三日月のカタチをした浜辺から名づけられたムーンビーチ。その浜辺にたたずむと、沖縄の光や風を全身で感受することが出来る。ビーチをとりまく木陰を失いたくない気持ちでピロティの技法で再現することを思い立った。それは、学生時代に八重山で見た、千本足のガジュマルの緑葉をいっぱい広げ、幾つもの幹がたくましく大地に根を下ろした、あの木陰の空間を建築的に具現化したものである。その木陰は亜熱帯の沖縄に涼風をもたらし、人々が憩える最良の空間になり得ると思った。ピロティは大地を失わずして建物を造る事が出来る不思議な建築の技法であり、海への風景の連続性を損なうことなく生かす事が出来る。**そこでは、コルビュジェがよく用いた「ピロティ」が、時には、流行として捉えられているように思われたが、私はそれを建築の哲学として位置づけていた。**私自身「建物の形態は、その空間から生まれてくるものであり、風土に合ったものをつくりたい」と考えている。

木陰を思わすピロティで憩う人々、子供に急かされて集まる大勢の家族づれで賑わっていた

『沖縄建設新聞』
2005年6月8日(水)2227号

# 沖縄ん 建築紀伝

## 横断する眼差し

■7回■　国場幸房(建築家)

## 天空を大地へよび込む空間の創造

**実践における思考**

子供の頃から聞いていつも気にしていた言葉で**沖縄のオジー、オバーの会話の中でよく出る「シメ(曇)ー知っち、ムノー知らん」いう諺がある。**その諺は人間における物事の道理や人間の心を重要視したことに対し、知識や学問が時折その本質を忘れていることへの警鐘を促すことを意としていることである。**その諺は私が物事を思考する中で、あらゆる事象に当てはめる習性になっている。**例えば、建築学の本質は、様々な与条件の中からその本質を見抜き、自然環境に適応した人間のための空間を創る学問であるということが基本であると。

ムーンビーチホテルの立地条件は、沖縄を象徴するような自然環境に恵まれた風光明媚なところに位置している。ピロティの技法を生かすことにより、風景や眺望を損なうことなく人々の集う憩いの空間となる。海辺を抱きかかえるようなL字型の平面は四〇〇mにもおよぶピロティ空間を創出し、それは建築面積の約八十%を占める約三千坪のピロティである。それは沖縄の風土に適した大らかで豊かな空間とガジュマルの木陰を想わせ、浜辺に集う数千人の人々の憩うスペースとなりえる。吹き抜けの空間は各階の回廊をつき抜けて、天空を大地へよび込んで豊な空間を演出してくれる。そのようにしてムーンビーチは三百余の客室と約三千坪のピロティを加えるとかなり大きな建築空間になる。

一般的には同室数を有する**約六千坪の建物は約四十億円前後の工事費になる。その同じ工事費で約二倍に該当するピロティを含めた約一万二千坪の空間する創ることになる。**それは、常識を覆したアイデアと努力が必要不可欠で、様々な思考、試算を繰りかへした。

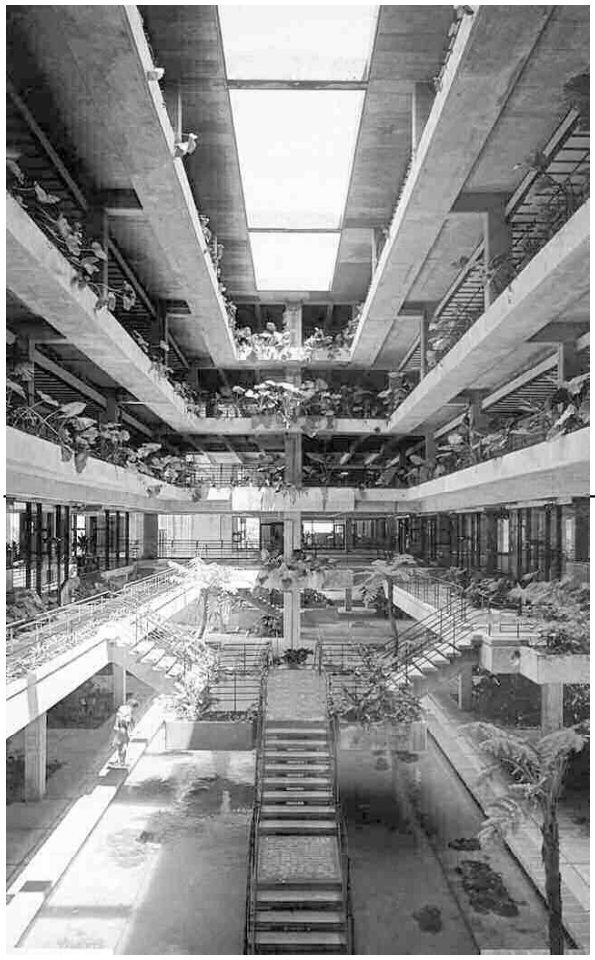
例えばリゾートホテルだから「こうしなければならない」という既成概念を先ず疑ってみることから考え方をスタートした。豊かな空間を創ることで多くの人々の憩いの場となるよう実現するためのあらゆる方法と考えを繰り返し思考した。先ず建築コストの大きな比率を占める躯体のコンクリートの値段は、一㎥あたり約一万円位である。使用コンクリート量は三万㎥なので約三億円になり、それに付随する鉄筋や型枠の概算コストを加えると**十数億円で四百mのピロティを要した開放的な一万二千坪のコンクリートの夢の空間が創れる事になる。そのことを幾度も幾度も試算を繰り返し確かめた。**

さらに仕上げを通常のコンクリート打ち放しにすると金がかかるので「コンクリートやりっ放し」という考え方で進めた。表面がきれいな打ちっ放し仕上げではなく、荒々しいコンクリートの素材感をそのまま表現することである。その考え方で同じ型枠を五~六回使うことにより、億前後の建築コストを下げる事が出来た。躯体以外の部分に関しても同様な発想をいたるところ展開していった。例えばホテルのメインロビーは、沖縄のエメラルドグリーンの素晴らしい海の景色をガラス越しに見て感動を与えるように、内部を暗色のペンキの仕上げですませたり。客室やその他の壁面部分の仕上げは、沖縄の瓦屋根に使われるムチを塗り、モルタルペンキ仕上げの三分の一のコストで出来る仕上げを考え出したり。それはこれまでは前例の無い内装の仕上げであるので、実施するには勇気を要した。

内装のコストを抑えながら、結果的にも沖縄らしい雰囲気を醸し出すことができたと思う。空間を立体的に豊にするための吹き抜けは、多くの緑を絡ませながら、恐怖感を与えない数キロに及ぶ手摺りを通常の三分の一の単価に抑える合理的な手摺りの設計に時間をかけた。

ピロティは緑をからませたモルタル刷毛引きで仕上げ。植栽計画にしても、沖縄の風土に適しているガジュマルを主体にし、海辺に生息しているテリハクサトビラ等をテラスに植えた。さらに建物を短期間に緑化するために芋蔓を沢山植えこんだ。本質が何かを考えることで、**あらゆる常識を逸脱した方法を考え、コスト削減を図りながら、大きな空間と緑豊かな空間を実現に導く事が出来た。**

「利用する人々」と「場」の関係性をより豊かなものにするための必要なスケールと空間を創出。大地の連続性を失うことなく、数千人の人々の集う木陰を思わせる「ピロティ」は多くの人々や子供達に親しまれ利用された。努力して生み出したはずの、そのピロティ空間が、現在失われているのは残念である。**それは今でもかつて多くの人々が利用した県民のビーチとして、より賑わっていただろう、と思うからである。**



天空を大地へ呼び込む豊かな吹き抜け空間

『沖縄建設新聞』
2005年6月22日(水)2229号

# 沖縄ん 建築紀伝

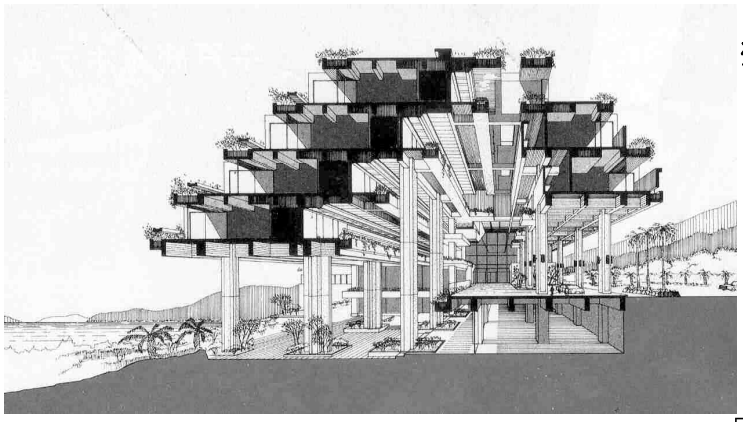
## 横断する眼差し

■8回■　国場幸房(建築家)

## 建築家に過酷なコンペ世界

沖縄海洋博がオープンして、開催へ向けての激しい建設ラッシュが過ぎ去ると、気が抜けたような日々が続いた。小さな建物で、ゆっくり時間を掛けて仕事をしたい気分になっていたとき、突然、長崎の仕事の話がもちあがってきた。沖縄海洋博を見に来られた長崎のホテルオーナー田口氏がムーンビーチのホテルを見られて南国九州の長崎平戸島に同じ形式のホテルを建てたいとの話である。期日が無いので直ぐ来るようにと私がよばれた。

平戸口から船で渡り、建設地である千里ヶ浜の丘陵地の敷地を見せてもらった。**平戸大橋が開通する迄の約一年半で完成すること。それが設計と施工と合わせた与えられた期日である。**一一〇室余の客室と、或る条件を加えた大宴会場とショピング等諸々の施設と、全ての客室から海が見えること、ムーンビーチの工事単価で仕上げてほしいとの条件である。氏は既に3ヶ所のホテル旅館を所持されていたので、今回はそれ以外の設計に関する条件は控えてもらった。それだけに責任と重圧の掛かる仕事であった。福岡にあった国建の支所で図面を描くことにした。田口氏は毎週のように事務所に様子を見に来られた。約二ヶ月して基本設計のスケッチが出来たころ、**「良い設計が出来ます」と話したら、図面も見ずにすぐさま中洲の街で喜んで宴会をしてくれた。**



平戸観光ホテル蘭風の断面

実施設計に入りムーンビーチの断面を更に発展させた自信のある断面空間を提示させてもらった。施工は東海興業が工事を請負った。その頃、九州は建設不況で多少無理して請負っていた。一九七七年七月に一年一ヶ月で工事を完成させて施工した関係社が誇りを示してくれたのは幸せであった。ピロティーを含む延べ約四千五百坪の建物が一五億五千万円で完成。予定より一割程安く出来たことになる。

**この平戸観光ホテル蘭風は田口氏の永年暖めていた計画であった。それを遠く離れた沖縄に設計を依頼した英断に大変な敬意を感じざるを得ないし、**私も若さと情熱で成し遂げたことを誇りに思う。その後この様なかたちで仕事を頂いた事は少なく厳しい現実が続いている。

**建築の仕事は、施主・設計・施工の3者が信頼し合うって適切な予算と条件で仕事すれば、信頼に伴う責任よって期待以上の結果を得る可能性も有り得る。**世界の建築の歴史を考えてもその様にして建築文化が育ったと信じている。建築設計の職能に重きを置き、私も会員である日本建築家協会（JIA）が金額の安い方で設計者を決める設計入札方式に異議を唱えているのも其処にある。設計の発注の仕方としてコンペ、プロポ、QBS等を提示させて頂いているが、その他の方法も皆で考えていただけたらと思う。

沖縄はひと頃、他府県に比べ比較的コンペ（設計競技）が多いと羨ましがられたことがある。しかしコンペは建築家にとっては過酷な世界である。好きな仕事だけに熱中して夢を膨らますと過度の徹夜と労力も重ねてしまう。**大分以前にコンペをやり過ぎて命を落とした人がいるとの話を聞いた事が或る。**又、コンペは、「建築とは何か」を真剣に考え勉強し、回を重ねるたびに力が付くチャンスである。今や世界的に活躍している建築家安藤忠雄氏の著書「連戦連敗」はその事を力説した良書である。しかしコンペは一つの作品を選出するために参加した多くの方々に経済的な負担を強いることになる。良い物を創るのがコンペの目的であるから、それに参加する人々への経済的な負担を少しでも軽減する予算を計上する配慮が欲しいものである。

コンペの難しさに、シドニー（オーストラリア）のオペラハウスの世界コンペで、遅れて来た審査委員のサーリネンが1次審査で落ちた作品を拾い上げて一等当選にさせた有名な話がある。私は幸運にも6回コンペで仕事を頂き、それが私の代表作の多くを占めていて、しばらく当選率3割台を維持していたが落選が続いたので、数年前からコンペは次世代に任すことにした。

平戸観光ホテル蘭風の外観

『沖縄建設新聞』
2005年7月13日(水)2232号

# 沖縄ん 建築紀伝

## 横断する眼差し

■9回■　国場幸房(建築家)

### 沖縄県立公文書館でBCS賞を受賞

私の設計担当した主な仕事に、コンペで頂いた仕事で那覇市民体育館、琉銀健保会館、具志川市役所、沖縄県立公文書館、読谷文化センター等がある。その他に二～三の住宅と國場ビル、ムーンビーチホテル、平戸観光ホテル、琉大キャンパス基本計画、国吉フッションビル、勤労者いこいの村沖縄、宮古空港ターミナルビル、パレットくもじ、沖縄美ら海水族館、等多くの仕事を担当させてもらった。その中の幾つかの建築物は社会的な色々な賞をいただいた。その中でも**公文書館で頂いたBCS賞は、全国的な大きな賞であり社会へ幾らかの恩返しが出来た様で嬉しかった。**

この公文書館のコンペ要綱のひとつに「沖縄的なシンボルになる様な」とあったので、沖縄瓦屋根の建物を想定した。予期したように十四の応募案の過半数が瓦屋根の案であった。私の案は屋根を出来るだけ威圧感の無いヒューマンなスケール感覚でとらえられる集落を思わせるように、屋根の連なりをイメージし造形表現とした。また私の好きな沖縄の昔からの建物である高倉の要素をイメージの中にとりいれた。保存庫の建物の外壁を太陽の直射熱を遮るスクリーンに沖縄の高倉の壁面によく使われる菱形の竹網を模してデザインしたプレキャストを施し、ベンチレーションの役割をもたせた。

また、切妻屋根の小口面に瓦屋根の厚みを感じさせる設計に苦労した。サービス導線は階別に分け、**人々の導線の入り口を一般利用者と管理者を左右に完全に分離し、少々冒険をした。**その間を風と明かりが通りぬけ、落ち着いた亜熱帯地域に相応しいアサギテラスになる快適な空間を設定した。幸いにも当選させて頂き、又、大きな賞まで頂いたので関係者皆で喜んで頂けるものと思っている。実施設計に至って、この建物は此れまで経験した物に比べ、少し予算も時間もゆとりがあった。又工事費の一%を芸術文化の要素を建物に加えるための予算が組まれていた。建築と美術のジャンルの融合性と緊張感を高めたかったこともあり、**沖縄在住で酒の飲める条件に適う県立芸大の教授であられた大嶺實清氏を中心に和宇慶氏、上條氏も加わって共に仕事をすることが出来た。**約束でもあった10回にわたる居酒屋での夜食と酒席で、楽しく愉快に建築論と芸術論を交わすことが出来た。そのことにより、現在の展示されている歴史に残る印鑑を摸した焼き物や、ヒンプンを兼ねた彫刻や、小物の作品に、シルクで刷った琉球の古地図の作品等を実現化することが出来た。完成した建物に温かさと深みを加えて頂いたと感謝している。

少し残念なのは、公文書館が特殊な用途だけに訪れる人が少ないことである。時には、喫茶店か沖縄そば屋でも併設してあればと思ったりする。その後読谷文化センターの仕事を終わった頃に、水族館の話が出てきた。

ベンチレーションの役割を持たせた
プレキャストスクリーン

本土復帰記念事業として沖縄海洋博が開催され、その中にその当時東洋一の沖縄水族館が著名建築家槇文彦氏の設計によって創られた。

その後二〇年程すると日本国内の多くの所で巨大な水族館がブームの如く建設された大阪の海遊館や東京の葛西水族館をふくむ海ノ中道、名古屋、八景島水族館等である。当施設も沖縄総合事務局の夢多い企画のもとで計画された。それまでの資料によるとバブル崩壊で規模は縮小されたようだが、この企画への期待と重要性は大きかった。基本計画の段階でも少し参加させてもらっていたが、有りがたいことに実施の段階で**この仕事をプロポーザルコンペで国建が頂くようになり、喜びと大きな責務を感じながら私も設計に参加した。**

集落の屋根の連なりをイメージした屋根

『沖縄建設新聞』
2005年7月27日(水)2234号

# 沖縄ん建築紀伝

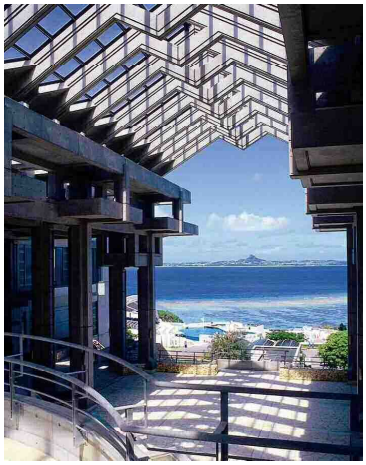
## 横断する眼差し

■10回■　　国場幸房(建築家)

## 夢への挑戦・沖縄美ら海水族館

### 沖縄美ら海水族館の新たなる挑戦

**基本計画は、実施設計の段階までにまだ平面計画で煮詰めるべき箇所があり、約一ヶ月でその変更を認めてもらった。**魚の水処理に関しては経験豊な（株）環境設計事務所がJVで協力してくれていたので安心だった。国建のスタッフは飼育世界を知るために旧水族館での体験学習をすることも出来た。その他本土の大規模な主なる水族館数箇所と、外国のホンコン・シンガポール・ジャカルタ・オーストラリア等十ヶ所程の代表的な水族館を見学させてもらった。ときには発注者側・飼育運営する側も同行し、食事をした後の酒の席でお互いのこの計画への夢を語りあった。**私自身はこれら多くの水族館を見せてもらいながら出来るだけこれらの施設に無い新しい物を創る事を心がけていた。**例えば、とくに大水槽で、要求されていた水中トンネルをアクアルームとして設計変更したり、シアタールームのスクリーン面を水槽に向けたり、澱むことのない動線と期待感の演出を考えた、大勢の観客が歩きながら、座って休息とりながら、又は飲食しながら同時に大水槽を観賞出来る空間をイメージした。沖縄の眩しい太陽の光を大水槽の上のブラインドを開閉して、差し込む光を動かすことで神秘的な演出を期待するような仕掛けを設置するなど考慮した。又多くの人々が集う入り口付近には沖縄の気候にはどうしても必要と考えて大きなパーゴラ空間を設計に取り入れた。**そしてその空間から眺める沖縄の海の変化するコバルト色の海の色の美しさを、背景に伊江島をとりいれることで、より効果的に見せてくれることを期待した。**


ゲートからの眺望

**世界最大の魚類であるジンベエザメを一枚の大きなパネルを通して見たいという気持ちは観客を含め、皆の希望であるはずだと直感した。しかしこれまでの基本計画の報告書には四本の補柱つけることに度重なる会議で決定されていた。実施設計に至るにあたって、この件に関しての未練が捨てがたく各メーカーの技術者と直接会って数度話しをきくことにした。**其のなかで日プラの職人的技術者でもある敷山社長の話を聞く機会を得た。氏は沖縄海洋博で旧水族館の水槽パネルを施工されていて,その独自の技術を生かして、その後世界中の数多くの水族館を日本の技術として採用され独自性を発揮されていた。氏からパネルを現場溶接し一枚につなぐことで、補柱が取り除ける技術があることを聞き工事中である鹿児島の水族館の溶接現場を見せてもらった。可能性が見えたのでどうしてもそれを実現したくなった。今回の水槽は、開口巾二二㍍・縦七・五㍍である。水深の一〇㍍水圧を加えると、試算で厚さ六〇㌢㍍になるという。此れまでの世界記録の厚さは三六㌢㍍なので、開口部・巾・縦・厚さとも群を抜いた世界一の大きさである。それを実現することは勿論設計者の望むところであり皆もそれを期待するものと信じた。職人敷山氏にとっても実現出来る可能性と挑戦するに値するものと魅力を感じていた。それを実現させるためのお願いすることになり、当時の国営沖縄記念公園事務所長であった**西川嘉輝氏に英断をいただけたのはありがたかった。又、それは基本構想に携わった方々から受け継いだ夢の実現への、数多くの解答の中の一つに成り得るとも思えたし、水族館をみにきた多くの観客にも大きな喜びと話題性になりえると思えたからである。**

そのことも、会議の後での幾度かの酒の席で、発注者側の西川所長やそのスタッフ、飼育側の内田館長やそのスタッフを交えての、雑くばらんに、互いのこの計画に対する意気込みと夢を語り合っていたことが幸いしたのだと思う。

勿論予算を増やすことは出来ないので側面の補柱を増やしアクリルの厚さを薄くするなど、いろいろ工夫して前面のアクリルの予算を生み出すことが出来た。最後の不安があったが、厳しい予算の中で敷山氏の日プラがそれを請負、その大パネルを施工完成させた。技術者の職能と誇りの世界を感じて有り難く思えた。

世界最大のアクリルガラス
(幅22.5m、高さ8.2m、厚さ60cm)

**物を創造する世界において、公のフォーマルな会議には利点と欠点があると思う。欠点の要素に、無難にはまとまるが、とくに多人数の会議だとなかなか新しい挑戦には至らないことが多いように思うからである。**

水槽を底から見上げるアクアルーム

『沖縄建設新聞』
2005年8月10日(水)2236号

# 沖縄ん 建築紀伝

## 横断する眼差し

■最終回■　国場幸房(建築家)

### 「光と風の建築」を求めて

沖縄美ら海水族館の関係者、現場に携わった人々、報道カメラマン等、大勢の人々の見守るなかで、夢の大水槽に初めて七五〇〇㌧の海水が大きな爆音と水煙をたてて流れ込んだ。「バンザーイ!バンザーイ!バンザーイ!」と水族館の現場に携わった人々の、この一瞬のために労苦を共にしてきたような、思わず感きわまって出た爆音に負けない大きな歓声であった。この水族館の建物には、世界最大級の大水槽に加えて世界最大の魚類である複数のジンベエザメや、マンタの群生、生きたサンゴの大規模展示、ギネスに掲載された世界最大の巾二二・五㍍、縦八・二㍍、厚さ六〇㌢㍍のアクリルガラス、そしてアクアルーム等、世界一、世界初と多くの試みを施してある。工事中に建設現場に掲げた「皆で世界一の水族館を造ろう」の標語は現場に携わる人々の建設への士気の高揚をうながした。鹿島建設を筆頭に県内の建設会社を含む四十社近くの企業と、その他多くの協力会社の**多くの人々の、思い出の現場になったと思う。**

美ら海水族館の全景

我々はこの水族館の設計監理に携わる幸せを得た。この機会を与えてくださった関係各位に深く感謝を申し上げたい。二〇〇五年六月現在、オープンして約二年半で六百万人(昨年の入館者数日本一)を超える観客が訪れ、多くの喜びの声も聞こえてくる。又この建物の建設に関係した人々の家族を連れて誇らしく案内している姿も想像できる。これからの飼育、運営においてはジンベエザメ等の館内での繁殖等、数多くの目標があると聞く。首里城等のように、沖縄県民の愛され誇れる財産として育ってほしいものである。

**公共施設は国民の税金を使って、それぞれの過程を経て、多くの人々とそれぞれの専門家の協力を加えて効果的に具現化され創造されて国民に還元される、国民の財産であることを、つい忘れることがある。**

地球のどの地点かによって地球環境は異なり、その環境によって生活形態も、その文化も左右される。日本の国だけでも、北は雪の多く降る北海道から、四季を感じ「わび」「さび」の文化を生み出した京都、そして亜熱帯に属する灼熱の太陽と、強い台風に見舞われるこの沖縄。それぞれの環境は建築文化に多少なりとも変化をもたらすはずである。その地域の建築文化を追求するのが地域に住む建築家の責務だと思って居る。**私の建築の設計に対する思考のあり方は、沖縄の一般的な家庭料理であるゴーヤーチャンプルーやカンダバージューシーを建築的に再現しているような気がする。それは地域・風土で生まれた素材の持っている力をいかに引き出していくかということにおいて・・・。**

**私の建築表現が多少地域性をおびているということで、法政大学の武者英二教授、琉球大学の福島駿介教授の薦めで、二〇〇〇年に私の六十歳を期して、東京と沖縄で「光と風の建築」と題した個展を開かせてもらった。私の恩師である大高正人先生も来られたので、四十年前の教えに対し、少しでも恩返し出来たのではという気になった。**

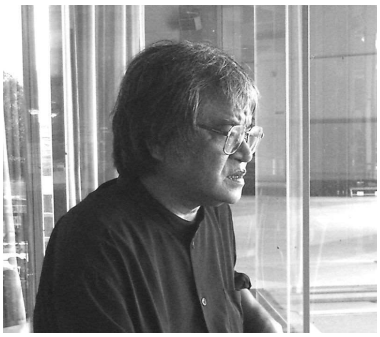
個展のオープンパーティー風景
新宿パークタワーにて

個展のオープンパーティーは、武者、福島両氏の司会と、大谷幸夫氏の乾杯の音頭で、平良敬一、二川幸夫、石井幹子、芦原太郎氏等、多くの著名人や、東京での昔の友人同僚、沖縄からの友人等、多数参加して頂いて、仕事を忘れた楽しい宴を催してもらった。

今年の三月、世界的な建築家丹下健三氏が亡くなれた。久しぶりに氏の設計された代々木体育館を見せてもらった。四十年以上経った今もその素晴らしさと新鮮さを感じ、改めて脱帽した。**建築の素晴らしさは、ライトが我々に教えてくれている。彼が九十年の生涯をこの世界に投じてもまだまだ未練があると・・・・・。**

私の所属する(株)国建は技術者を中心とした二百二十名余のスタッフで組織された総合建設コンサルタントをなし、その過半数が建築設計関係に携わっている。そしてそれぞれのプロジェクトごとにチーフとスタッフが責任を担って仕事をさせてもらっている。特殊で長期にわたる首里城復元や、公共工事、サンエー等の大型ショッピングセンター、G7サミットが開催された万国津梁館等の会館、ブセナテラス等のホテル関係、空港ターミナルビル、新聞社、住宅、等数多くの仕事をこなしている。

**この「沖縄ん建築紀伝」は、私が直接プロジェクトチーフとして携わった仕事を設計したときの「実践での思考」と背景の記録を酒の席で何度か建築仲間、特に伊志嶺敏子・親泊仲真氏に進められたのでまとめてみたものである。**おしまいに、最終回まで編集協力をしてもらった親泊仲真氏に、また仕事の合間をぬって協力してもらった国建のスタッフに感謝し、建築に携わる若い方々に多少なりとも新たな意気込みとイメージの喚起力の一端になればと願う。(完)



國場幸房（Kokuba Yukifusa）

1939 年　沖縄県那覇市生まれ
1963 年　早稲田大学第一理工学部建築学科卒
1963 年　大高建築事務所入社
1967 年　株式会社　国建入社
現　在　株式会社　国建　名誉会長
その他：ＪＩＡ(社)日本建築家協会 沖縄支部長(2003.5～2007.5)

Works

| | | |
|---|---|---|
| ・國場ビル | (1970 年) | |
| ・ムーンビーチホテル | (1975 年) | [新建築 7509] |
| ・琉球大学キャンパス基本設計 | (1976 年) | |
| ・平戸観光ホテル蘭風 | (1977 年) | [新建築 7710] |
| ・国吉ファッションビル | (1978 年) | |
| ・勤労者いこいの村沖縄 | (1979 年) | [新建築 8004] |
| ・ホテルサンコースト | (1980 年) | [日事連会長賞受賞　新建築 8112] |
| ・ＯＴＶ国和プラザビル | (1982 年) | |
| ・琉球銀行保険館 | (1982 年) | [指名コンペ当選] |
| ・那覇市民体育館 | (1986 年) | [建築士会コンペ当選　新建築 8710] |
| ・福岡レイクサイドカントリークラブ | (1987 年) | |
| ・具志川市庁舎 | (1987 年) | [日事連会長賞受賞　指名コンペ当選] |
| ・パレットくもじ | (1991 年) | [ＡＩＪ霞ヶ関ビル記念賞受賞] |
| ・沖縄公文書館 | (1995 年) | [指名コンペ当選　新建築 9609<br>ＢＣＳ賞受賞　日事連建設大臣賞受賞] |
| ・宮古空港新ターミナル | (1997 年) | |
| ・読谷村文化センター | (1999 年) | [建築士会コンペ当選] |
| ・金武町総合保健福祉センター | (1999 年) | |
| ・海洋博記念公園沖縄美ら海水族館 | (2002 年) | [公共建築賞・特別賞 2006]<br>Discovery channel 放映 1 hour　2006.11 |
| ・那覇市庁舎 | (2012 年) | [那覇市新庁舎設計者プロポーザル 最優秀賞]<br>[第 1 回沖縄建築賞　審査員特別賞]2015.5 |

Activity

| | | |
|---|---|---|
| ・琉球芋の会発足 | (1998 年) | |
| ・個展「光と風の建築」開催 | (2000 年) | [沖縄・東京] |

Hobby

・ゴルフ・マージャン・囲碁(五段)・クラシックギター・酒・タバコ(うるま)
・ピアノ(63 才より独学で始める)